

劇団！王子の実験室 第四回公演

Kings N's 夢の城

作／田口浩一郎

舞台中央にギターを抱いた織田信長が鎮座。建設屋の丹羽さんと、市立博物館の学芸課長（女性）が舞台中央に立つ。

丹羽
新幹線で名古屋から乗り換え、東海道本線快速にて20分ばかり。安土城駅はそこにある。冴えない地方都市なんだけれど、市の中心にほど近く、国宝の安土城が傾いて建っている。僕の名字は丹羽だから、このお城を建てた侍と同じ名字で、立場もよく似ている。血もつながったりしてね…。でも僕なら…こんないい加減な仕事はしない。

丹羽さん、柱に手を当てるそぶり。

丹羽
こりや、ひどい。

でしよう。

丹羽
見えないように、あっちこっちカスガイが打つてある。

課長
ええ。

丹羽
こんな継ぎ手だらけで、よく今まで建っていられたな。

課長
本当に。

丹羽
課長さん、これ、このまま修復する積りですか。

課長
国宝ですから。

丹羽 国宝？この手抜き工事が？
課長 …。
丹羽 倒壊しやすい構造…それから、この吹き抜け…火が付いたら。パツと燃え上つて一瞬で。ベツチヤンコですよ。
課長 …ええ。
丹羽 でも、やだなあ、それウチの責任とか言われてもね…。つまり、私の責任も問われるわけで…。
課長 …。
丹羽 部材は入れ替えちゃダメですか？せめてカワラは軽い素材を…。
課長 当時そのままお願いします。
丹羽 無理だよお、課長さん…そりや無理だ。
上田 丹羽さあーん。
丹羽 あ、上田くん。どうだった？
上田 ひどいっす。
丹羽 あ、やっぱり。
上田 大手門から天守に向かつて、木造建築が導火線みたいに…。ふもとで火の手が上がったら…。
丹羽 山ひとつ、丸ごと大火事か…。
上田 はい。
丹羽 駄目なんでしょうね。防火設備とか…スプリンクラーとか…。
課長 国宝ですから…。
上田 あー、暑ちい。(座りこむ)

丹羽 お疲れさん。

上田 やつと日陰に入れた。

丹羽 あー、麓からずーっと石畳だもんな。

上田 建物はともかく、あの石垣と石畳は立派ですよ。本当に雑草一本生えないくらい、キレイに敷いてあつて。

丹羽 何で一番立派なはずのメンテナンスが、こんなにボロボロなんだろうなあ…。

上田 尽きたんじゃないっすか、金が。

丹羽 あー、あるかもね。何せ、信長つてのはバカだつたつてハナシだから。

上田 バカ？

丹羽さんと上田くん、笑う。その間に、舞台端に座っていた侍姿の佐太郎は立ち上がり、課長の背後に立つ。

佐太郎 そんなことありませんよ！

上田くんだけ振り返る。佐太郎、さつと自分の席に戻る。

上田 へ？

課長 は？

上田 何か言いました？

課長 あ、いえ、なにも。

上田 そうだ、課長さんにも聞いておきたかったんだ。

課長 はい。

上田 何年保もたせたいですか？

課長 は？

上田 何年、まっすぐ立たせておきたいですか？この建物。

課長 え…ずつと。

上田 このまま修復するとね、台風や何かですぐまた傾きますから。

課長 でも…ちゃんと直せば…何百年も建っていたものですし…。

上田 奇跡的にね。

課長 文化庁から、当時のまま修復するようお願いが来ておりました…。

上田 だからそれだと…。

課長 とにかく、もうお宅の会社に受注して頂いた工事ですから、責任をもってやって下さい。ご意見があれば上にはお伝えします。

上田 …。

課長 当時のままの設計で、十分な強度を持たせるようお願い…。

上田 だから…。

丹羽 こんなに継ぎ手だらけの構造だと思わなかったんだよ。あちこち壁を剥がしてみて初めて分かったことなんですがね…。

佐太郎 二十年。

上田 へ？

佐太郎 二十年、保てばいいです。

上田 本当ですか？

課長 あ、…え？私じゃ…。

丹羽 馬鹿言っちゃいけません。そんな工事じゃウチの看板に傷がつきますよ。

課長 あ、いえ…。

丹羽 せめて心柱一本入れちゃまずいですかね？で、そこに梁を通すんです。

佐太郎 ダメです。

丹羽 あんたにそんなこと決める権限ないでしょう。

課長 あの、私は…何も…。

丹羽 どうですか？一旦上に差し戻して、会議に…。

丹羽さん、振り返る。佐太郎と目が合う。

丹羽 …。

佐太郎 …。

丹羽 だれ？

上田 は？

課長 え？

佐太郎 …。

丹羽 ちよんまげ…。

佐太郎 あんた…私が見えなさるのか。

丹羽 …。

佐太郎 …。

丹羽 駄目ですよ課長さん、変な人入れたら。

課長 は？

丹羽 は？つて…。

佐太郎、お茶を点て始める。

丹羽 あ！ちよつと、こんな所で…本丸、今立ち入り禁止ですから…ね。

佐太郎、丹羽さんに茶を勧める。

丹羽 …。ピクニックは他所よそでやって下さい。

上田 観光客ですか？

丹羽 うん、何かコスプレまでして…。

上田 どこ…？

丹羽 あ？…ここ。(佐太郎を指さす)

上田 ……この、どこですか？外？

課長と上田くん、顔を見合わせる。

佐太郎 見えないんだ。

丹羽 …？

佐太郎 上田くんには見えないんだ。

丹羽 …いるじゃん。(佐太郎を指さして)

上田 暑いですからね。

丹羽 なに？

上田 ちよつと休んだ方がいっすよ。

丹羽 何が？

課長 熱射病？ジュース買ってこようか？

上田 いっすか？

丹羽 待て。

課長 スポーツドリンクとか？

上田 あ、じゃ…カネ…。

課長 いいわよ、あたし出しとく。

上田 いや、いけません。

課長 いいって、経費にしとくから。

上田 やめて下さい。最近、そういうのうるさいですから。

丹羽 あー、いいよ、いいって…あるから、飲みもの…ほら。

丹羽さん、佐太郎の茶を取り上げて飲む。気付かない二人。

課長 じゃ秘密で、秘密で。

上田 えー、あ…だ…本当に…。

課長 すぐだから、事務所あるから、自販…ね、行ってきます。

上田 あ…。

課長、席に戻る。

上田 ちよつと…悪いなあ、ねえ…基本いい人なんすね、あの人。とりあえず、あとでお金…。

上田くん、丹羽さんの方を振り返る。丹羽さん、すでに佐太郎の茶席でお茶を喫んでいる。

上田 …。

丹羽 …。

上田 あるじゃないですかあ。

丹羽 え？

上田 あるじゃないですかあ…ドリンク。言つて下さいよお。

丹羽 だつて、止めたけど…。

上田 あー、もういいつすから、言いワケとか。(二人のそばに座り込む)

丹羽 …。

上田 事務所、戻つた方がいいんじゃないつすか？

丹羽 平気だつて。

上田 いいつすよ、あと俺やつときますから。

佐太郎 お前じゃ無理だよ。

丹羽 え。

上田 あ、傷つくなあ…。

佐太郎 お前、わかつてないもん。

上田 げえ、ひでえなあ…。

佐太郎 わかつてない…。

丹羽 やめろ。

上田 いくら先輩だって、言っていることと悪いことが…。

佐太郎 なぜ、この城が傾いて建っているのか。なんで継ぎはぎだらけのもろい構造をしているのか。

上田 手抜きでしょ。

佐太郎 喝！

上田 え？

佐太郎 この歪み^{ゆが}を楽しむためであろうが！

上田 …ゆがみ？

佐太郎 およそ凡て^{すべ}の物は、自らの重みに耐えている。重みは物の形を歪め、壊し、やがてこの世から消してしまふ。これに逆らうは愚かなこと。

上田 だから、ワザと手え抜いたつてんですか。

佐太郎 それでも、あえて建てるということ。

丹羽 …。

佐太郎 なぜ、それが美しいかという事について…お前はわかっていない。

課長、舞台に登場。

課長 お待たせしましたあ。

上田 …。

丹羽 …。

課長 あれ、飲みものあったんですか？やだあ…。

丹羽 …。

課長 …どうしたんですか？

上田 …なんか、難しいんですね。

丹羽 あ、いや…。

上田 まあ、僕は建設屋ですから、自分の仕事をするだけです。ただ…この構造を残すのは賛成できないな。危険だから。

丹羽 いや、そりゃ俺だつて。

課長 あ…ジュース。

上田 あれ…二人分？

課長 はい。

上田 あ…かたじけない(ジュースをもらう)。丹羽さん。

丹羽 はい。

上田 ちょっと、散歩してきます。

課長 暑いですよ。

上田 いや…考えをまとめたいんです。

上田くん、舞台から所定の席へ戻る。

課長 …具合、よくなりました？

丹羽 …。

課長 お茶よりスポーツドリンクのほうが良いかもしれませんよ。

丹羽 本当に…見えないんですか？(佐太郎が)

課長 …え？

丹羽 あ…いや。

課長 お疲れなんですね。

丹羽 …まあ。

課長 洒落てますね。

丹羽 え？

課長 赤楽の茶碗で一服なんて。

丹羽 あ、これ私のじゃ…。

課長 やっぱ、狙ったんですか？

丹羽 は？

課長 安土城で…信長気分みたいな。

丹羽 いや、私そういう趣味は…。

課長 これ、本物かしら？

丹羽 は？

課長 茶碗ですよ。高いんですよ？

佐太郎 高いですよ。

丹羽 こら！

課長 やつぱり！

課長 良かったわ、こういう趣味に思い入れのある方なのね。

丹羽 無いです。

課長 あら、ご謙遜。

丹羽 いや…。

課長 私もね…こういうの大好きなんですよ。古いもの。

丹羽 はあ。

課長 本当は、純粹に調査とかで関わりたかったわ、このお城に。

丹羽 学芸課長さんでしたっけね…本来は。

課長 押しつけですよお、ウチの博物館からひとり出さなきゃいけないからって…。

丹羽 ああ…無理やり委員にされちゃったんだ。

課長 はい。

丹羽 僕も僕も。

課長 え？

丹羽 ちよつと中世建築をかじってたってだけで。

課長 そうなんですか？

丹羽 そうなんですよ。押しつけ押しつけ。

二人、笑う。

丹羽 ……どうしましょうか？

課長 え？

丹羽 本当にこのまま修復しますか？

課長 ……。

丹羽 不思議だよな…何で今まで建つてられたんだろう。

佐太郎 そういう設計だからね。

丹羽 ……え。

佐太郎 二百年でも三百年でも、真直ぐに建たせようと思えばできないことではなかった。傾けるのが善いと思ったのだ。だから傾けた。

課長 じゃあ、丹羽さんはワザと城を傾けたんだとお考えなのね？

佐太郎 お考えというか、事実です。

課長 何だか、負け惜しみみたいね。

佐太郎 何だと！（立ち上がる）

課長 え。

丹羽 おい、座れ。

佐太郎、渋々座る。

課長 あの…ごめんなさい。

丹羽 あ、いや…。

課長 でもこうして、こんな大きなお城が傾いて建っているっていうのも、非現実的な景色で私は好きです。

佐太郎 !

課長 職場の窓から、この首をかしげたみたいな姿が見られなくなるのは残念ね。カワイイのに…。

佐太郎 あんた、わかってますね！わかつてる！うん！…だが、やはり…。

課長 はい。

佐太郎 いつまでもこうであつてはいかん。人間、いつまでも猫背ではいかんだ。特に死に際は背筋を伸ばして…。

課長 死に際？

佐太郎 おう！この城は…あと二十年もしたら、燃えて無くなるのだから！

舞台、茶室を想定。舞台下手で語り始める長秀。そこに、黄金のナマズカブトをかぶった上田佐太郎が登場する。

長秀 天正四年一月、佐和山でのんびり金勘定しておたわしのもとへ、信長公からの使いが来た。すわ一大事と

京に上ったところが、二条城の茶席に呼ばれた。

なんじやと思つて黙つておると、信長公はこう申された。

「琵琶湖の西の海に城を築け」と…。

もつたいぶつた割にはそんなことかと…。言つちやなんじやが、この丹羽五郎左衛門、金勘定と城を建てるのが最も得意な男じゃから。

だかの…何へん図面を持つて行つても、上様は「善し」とは言わなかつた。

長秀、図面を拡げる仕草。にじり寄る佐太郎。

長秀 見よ！大手門から本丸に到る道の複雑なこと。これなら、上様の居場所を敵に感づかれることはまずない。

佐太郎 …。

長秀 要所要所に配された石垣。とえはたえ十重二十重に巡らせた濠。ほり水と山、現地の自然を活かした無駄のない、経済的

な設計。

佐太郎 …。

長秀 文句のつけようがない！

佐太郎 …。

長秀 なあ。

佐太郎 はい。

長秀 何が悪いんだと思う？

佐太郎 さあ…上様は何と言われているのですか。

長秀 一言、「足らん」と。

佐太郎 ほう。

長秀 …。

佐太郎 何が。

長秀 知らん…お前。

佐太郎 はい。

長秀 分かるか。

佐太郎 何で。

長秀 うん。

佐太郎 私に聞くんですか。

長秀 聞いたのじゃ、えらいヤツには。武士に商人に宮大工、それから南蛮人、みんな聞いた。…「ワツカリマセーン」
とか抜かしおつて…もう。

佐太郎 …。

長秀 だから、一旦な…んも知らんやつにな…最近、前髪を上げたばかりの小僧に…聞いてみようかなと…思っ
たわけ。上田…佐太郎殿。

佐太郎 ふーん。

長秀 ……ところで。

佐太郎 はい。

長秀 お前の、そのカブトは何じゃ。

佐太郎 ああ、やっと気付いてもらえましたか。

長秀 いや、気づいてはいたんだけど。

佐太郎 ナマズっぽいカブトです。

長秀 ふーん。

佐太郎 あげましようか……なーんちゃつて。

長秀 いらん。

佐太郎 超カブいてませんか？これ。

長秀 いいのか？

佐太郎 ……いいですよ。超カッコイイ。

長秀 へえ…。

佐太郎 美意識じゃないですかね？

長秀 へ？

佐太郎 足りないもの。

長秀 ……美意識。

佐太郎 はい。

長秀 ……どういふことだ。

佐太郎 例えば、この濠。(筆を持つ仕草) ……要らない。(ハツを描く)

長秀 あ。

佐太郎 ……ここまで市街地にしましょう。

長秀 そんなことしたら、城の間近で布陣されてしまうぞ！

佐太郎 でも、この方がにぎやかですよ。それと…この石垣、足りない。

長秀 げ！

佐太郎 一の丸から本丸まで、グルツと石垣で囲みましょう。

長秀 それだけの石をどっから持つて来るつもりじゃ。

佐太郎 運ばせましようよ、金で。

長秀 いくらかかると思つとるか！

佐太郎 でも、まだらに石垣なんて格好悪いでしょう。

長秀 無駄じゃ。最前線でもない場所に城をつくる事だつて納得できんのに、そんな大げさな石垣など。

佐太郎 そこが、「足りん」のじゃないですか…？

長秀 ……え？

佐太郎 でね、本丸には塔を建てるんです。例えば、こんな…。

佐太郎、ナマズカブトを凶面の真ん中に置く。

長秀 ……何故？

佐太郎 いかにも上様が好みそうではないですか。……そうだ、この最上階を上様のお部屋に致しましょう。

長秀 ナニ！？

佐太郎 素晴らしい眺めでしょうね、きっと。領内のどこまでも見渡せますよ。

長秀 阿呆か！では、領内のどこからもまる見えという事ではないか！

佐太郎 ええ。

長秀 格好の的だぞ！「信長公の居場所はここですよ」と敵に教えているようなもんじゃないか。

佐太郎 大丈夫。

長秀 何がじゃ！

佐太郎 ここまで敵が来るようになったら、上様も我々もお終いですよ。

長秀 ……。

佐太郎 そうだ！この塔に相応しい名前をつけましょう。何が良いと思います？

長秀 名前…。

佐太郎 はい。

長秀 ……どうでもよい。

佐太郎 それはいけません。上様の居場所ですよ。

長秀 「見晴らし丸」とか…。

佐太郎 ダメだ、テンでダメ。

長秀 何だと！

佐太郎 …天主。

長秀 …ん？

佐太郎 天の…主と書きまして、天主。…天主閣なんてどうでしょう？

長秀 …天主。

佐太郎 喜びますよ、信長公も。

長秀 …あー、天主。天主…天主…。

佐太郎 …。

長秀 …いいかもな。

佐太郎 分かつてもらえました？

長秀 やっぱダメだ。

佐太郎 え？

長秀 わしが。わしがダメ。

佐太郎 …。

長秀 お前、勉強してるな。…わし、こういうの絶対思いつかんもん。

佐太郎 ちよつと、風流に興味があるのです。

長秀 ほう。

佐太郎 だから、上様の気持ちも少しは分かるのかもしれない。

長秀 お前、侍よりも茶坊主になれ。出世するぞ。

佐太郎と長秀、笑う。と、舞台上、信長が一人の役者を手招きする。信長、書状を書く素振り。その書状を役者に渡す。役者、足軽となる。

足軽 失礼仕る。

二人 ?

足軽 信長公の使いにて候。入つてよろしゅうございますか。

長秀 …入れ。

足軽 は。

足軽、かなり無遠慮に舞台中央寄りに来て座る。

足軽 ここが佐和山ですか。…遠うございますな。

長秀 上様の使いとな。

足軽 は！

長秀 申せ。

長秀 は？

長秀 用向きを申せ、さつさと。今、ようやくノッて来たところなのじゃ。な、佐太郎。

佐太郎 はい。

足軽 されば…(書状を拡げる仕草)…。

安土山築城のこと、大儀である。

されど、先ほどから聞いておれば、お前ら余の気持ち、ぜんぜんわかつてない。
何が見晴らし丸じゃ。

城は建てれば善いというものではなく。

城は建てれば崩れるものである。

このこと、忘るべからず。

肝に銘じて励み候事、申し付。

信長

長秀 建てればよいというものではない？

足軽 はい。

長秀 ……どうしろというのじゃ。

佐太郎 ……。

長秀 ほかには何も？

足軽 は！

長秀 ふーむ。

佐太郎 城は建てれば崩れるもの…。

長秀 ……なんじゃ。何ぞ思いついたのか？

佐太郎 いえ…この城…この城がなくなるのはいつですかねえ？

長秀 は？

佐太郎 いや、例えば落城したり、燃えてしまったり…。

長秀 城を建てようというときに、負けることを考えてどうする。

佐太郎 いえ…でも、どうです？永久に建ち続ける建物などあるものでしょうか。

足軽 ありませんな。

長秀 しかし見ろ、この造作の堅牢なこと。人が手を入れ続けければ…なに、三、四百年は朽ちずに残るわい。

佐太郎 じゃ、朽ちるわけですな。

長秀 なに？

佐太郎 何百年後かは知りませぬが。

長秀 まあ、そりゃ。

佐太郎 であるとすれば、それを見据えて城を築くべきではないでしょうか。

長秀 でもなあ、何百年も先だぞ。

佐太郎 ええ。

長秀 そんな先のことは、その時の人間が考えれば良いのではないか？

足軽 ころあ！

長秀 …え。

足軽 そういうコトだから、お前は足らんと申しておるのだ、よい歳をして！少しはこの小僧を見習わんか！

長秀 …。

足軽 見習わんか！…と、信長公が申しているような気がしました。

信長、何度もうなずく。

長秀 貴様、知ったようなことを…わしにそのような口を利いて…覚悟は…。

佐太郎 いや…。

長秀 え。

佐太郎 この者の申すこと、あながち外れているとは申せません。

また深くうなずく信長。

長秀 何じやお前まで！わしがどう間違っておるといふのじゃ！

佐太郎 人は美なるもの、完全なるものを永遠に保とうとします。…しかし城も国も、実のところ必ず滅びるものです。

長秀 …。

佐太郎 上様はこれに目を瞑りたくないだけなのでしょう。

足軽 そうそう。

長秀 …。

佐太郎 そういうことを言いたかつたんでしょう？

足軽 まさにそろう。

深くうなづく信長。

長秀 じゃあ、どうしろというのじゃ。

佐太郎 滅びることから考えましょう、国も城も。

信長のそばで、呆けたように佇む丹羽さん。

J r. 平成43年6月。彼女のアパート入りびたり生活も10日目を迎えた。最初のうちこそ楽しかったが、長雨のせいでもうどこにも行く気がしない。今日も雨だ。こんな日にも、父ほりばたさんはお濠端で城を眺めているんだろう

か。突っ立って、バカみたいに。

女 帰んなくていいの？

J r. うん。…うーん。

女 お母さん、心配してるんじゃないの？

J r. してるだろうね。

女 送って行くか？
J r. いいよ。
女 いいよじゃないでしょ。あたしの部屋だよ。
J r. 邪魔？
女 邪魔じゃないけどさ。…あんま、よくないでしょ、未成年をさ…。
J r. 大丈夫だよ。連絡してるし…。
女 嫌なんだ？
J r. え？
女 地元の大学。
J r. …嫌だよ。
女 そんなひねくれちゃってるんだったらあ…受ければ良かったじゃん、東京の大学。
J r. 無理でしょ。
女 なんで。
J r. 一緒に行つてくれる？東京。
女 イヤだ。
J r. だよね。
女 なに？あたしのせい？
J r. …そうじゃないけどさ。親父があんなじゃね…。
女 …ああ。

J.r. お袋も年だし…。

女 無理だよ、一人で介護は…。

J.r. うん…。

女 でもさ…本当にボケてんの？お父さん。

J.r. …。

女 この間も遠くから見てたんだけどさ…。

J.r. …。

女 フツーに見えたけどね。

J.r. でもさ…定年してから、ずっとあの調子なんだよ。一日中、ずっと城を眺めてさ。

女 でもさ、あの城…お父さんが建てたんでしょ。

J.r. 建てたのは織田信長。修理したのが親父の会社。親父は働いてただけ。

女 …思い出あるんじゃないの？

J.r. いい迷惑だよ…そんなものために、こんな冴えない地方都市に縛りつけられるんだから。

女 …。

J.r. 無くなつちまえばいい。

女 城？

J.r. そう。

女 火付けちゃおうか。

J.r. 火。

女 そう、火。

J r. …いいね。

佐太郎 いいね。(女のそばに腰を下ろす)

J r. …。

女 …ん？

J r. 何か言った？

女 …何が？

J r. いいねって。

女 言つてないよ。

J r. …ああ。

ここで佐太郎、茶を点て始める。

女 嫌いなもの？

J r. え？

女 ……安土城市。

J r. そうだね、嫌い。

女 あたし、好きだよ。

J r. そう。

女 お父さんと、話してみたら？
J r. 何を？ボケてるのに。
女 ……そうかなあ…。
J r. ?
女 フツーに見えたけどなあ。
佐太郎 どうぞ。(茶碗を差し出す)
J r. ありがとう。
女 え？
J r. へえ…何これ。抹茶？
女 ……何が？
J r. いや…抹茶。おいしい。
女 ……なにそれ。
J r. なにつて…自分がくれたんじゃん。
女 ……。
J r. ……あ、美味い。本格的。
女 あげてないよ。
J r. は？
女 ……。
J r. 雨が止んだらさ…行く？

女 どこへ？

J r. 火、つけに。

女 本気？

J r. 本気。

佐太郎 その意気です。

J r. どうも。

女 何言つてんの？さつきから一人でブツブツ。

J r. …え？

女 気持ちわる。(テレビのチャンネルを変える)

J r. …。(周りを見回す。納得行きかねる様子。)

女 へえ…安土城公園で美術展だつて。

J r. ふーん。

女 行つてみる？

J r. 興味ないな。

女 信長ゆかりの名物茶器勢ぞろいだつて…。上田宗箇作、赤楽茶碗…。

佐太郎 …(ニヤニヤしながら、自分が焼いたとアピール)。

J r. 行こうか。

佐太郎 …(ウンウンと頷く)。

女 これ？(テレビを指さす)

J r. 雨上がったたら…火つけに。
佐太郎 (慌てる)。
女 じゃ、燃えちゃうんだ、これも。
J r. いいだろ茶碗なんか、燃えても。
佐太郎 …(怒る)！
女 高いんじゃない？
J r. いいんだよ、捕まらなきや。
女 …捕まるよ。
J r. だから、完全犯罪。
女 …(困ったように笑う)いいんじゃない？黙って東京行っちゃえば。
J r. 佐太郎 え！？
女 こんなところで愚痴こぼしてるんだつたらさ…。
J r. じゃあ。
女 なに。
J r. 一緒に行こう。
女 ヤダ。
J r. なんで。
女 あたし、ここ好きだから。
J r. 僕は嫌いなんだけどな。

女 何でも手に入れるのは無理だよ。

J.r. …。

女 何か棄てなきゃ。東京を棄てるか、お父さんを棄てるか。

J.r. そしたらさ…全部じゃん。

女 うん。

J.r. 母さんもさ、学歴もさ…。

女 あたしも。

J.r. …だよね。

女 棄てないと。

佐太郎 だから、いつそ。

女 え？

佐太郎 全部壊す。

信長のもとから、丹羽さんが歩み出る。

佐太郎 丹羽さん。

丹羽 …。

佐太郎 …丹羽さん。

丹羽 はい、何ですか。

佐太郎 いつまで、立たれる積りですか。

丹羽 …。

佐太郎 一席、設けました。

丹羽 ああ、これは…。

佐太郎 …(座を勧める)。

二人、腰を下ろす。佐太郎、茶を点てる。

佐太郎 天主を眺めながらの野点も、一興にて。

丹羽 うん。

佐太郎 …どうぞ。(碗を差し出す)

丹羽 (飲む…茶碗を見て) 赤いですね。

佐太郎 赤いでしょう。

丹羽 (城と交互に茶碗を見比べる。)

佐太郎 何故、毎日立つのです。

丹羽 …。

佐太郎 皆、あなたが呆けたぼと思つてますよ。

丹羽 …ええ。

佐太郎 …呆けたんですか？

丹羽 違いますよ。…ワクワクしてるんです。

佐太郎 うん。

丹羽 自分の引いた凶面通りに、(茶碗を捧げる)真っ赤に焼けて落ちる天主を想像するだけで…。

佐太郎 …ええ。

丹羽 ただ、子供がね…可哀想で。

佐太郎 うん。

丹羽 少しだけ、悔いているのです。

佐太郎 はい。

丹羽 我が子を、凶面の一部に組み込んでしまった…ことについて。

佐太郎 …。

佐太郎 おう、この城は…あと二十年もしたら、燃えて無くなるのだから！

呆然とする丹羽さんと課長さん。そこに、上田くんが走りこんで来る。

上田 わかりましたよ！わかりました、丹羽さん！天主閣ひとつ歪む面白さ、ダイナミックさ！安全性のみに目を

奪われていた僕の間抜けぶりったら…はは。

佐太郎、立ち上がって上田さんに近づく。

上田　そこで、どうでしょう？部材は替えず、このままの状態修復する。で、傾いたらなおす、傾いたらなおす。20年周期ぐらいで。そうすれば、直立した状態と傾いた状態、どちらの趣向も味わえるわけです。私はこれをフレキシブル天主と名付け…。

佐太郎、上田くんをはたく。目を塞いで舞台の外に連れ出す。

課長　どうしたんですかね、上田さん。一人で大騒ぎして。

丹羽　…。

課長　でも、いいかもしれませんね。

丹羽　何が？

課長　二十年に一度、天主を立て直すついで…。

丹羽　現実性低いんじゃないかなあ。

課長　…ええ。

丹羽　まず、上を納得させなきゃならないし、工事の内容も大幅に修正しなきゃならない。
課長　うーん。

丹羽 第一そんなことを提案したら、お互いに問われますよ…責任を。

課長 それは…嫌ね。

丹羽 ね。

課長 でも…どうしたらいいのかしら。

丹羽 城の構造は変えられない…でも、丈夫につくれ。

課長 …。

丹羽 無理だよお。

課長 …私、一度事務所に戻ります。

丹羽 あ、ええ…。

課長 文化庁の担当者に連絡取ってみますね。

丹羽 え、あ…でも。

課長 工事が進まないと、私も困るので。

課長、舞台を出てゆく。入れ替わりに、佐太郎が戻って来る。

佐太郎 や、ウチのアレが失礼し申した。

丹羽 …あのさあ。

佐太郎 はい、何でしょう。

丹羽 …何だかわからないんだけどさ、ヒトの仕事かき回さないでくれる？

佐太郎 そんな積りは…。

丹羽 あんた、ナニ？

佐太郎 は？

丹羽 幽霊なんか？

佐太郎 いえ。

丹羽 じゃ、ナニ？

佐太郎 構造です。

丹羽 ？

佐太郎 私は、この城の構造なんです。

丹羽 …構造？

佐太郎 この城の一部なんですよ、この瓦や石垣なんかと同じ。ただ、人から見えなかったり、たまに見える人に会うと怯えられたりしますが…。

丹羽 それって、幽霊っていうんだぜ。

佐太郎 この世に幽霊なんていませんよ。私は、この城の防災システムなんです。

丹羽 …防災？

佐太郎 城に賊がたかれば蹴散らし、雷が落ちれば未然に火を消し、漆喰が剥がれそうになったら塗りなおして…

それはもう細々こまこまと…。

丹羽 へえ…。

佐太郎 この城が四百年建っていられたのは、実に私のお陰ですよ。

丹羽 …。

佐太郎 しかし…駄目ですな。狙い通り、じつに善いかたちに歪んでくれましたが…このままじゃ倒れる。

丹羽 だろうね。

佐太郎 今少し、保^もつてもらわんと困るのです。

丹羽 (ため息)…ウチのアレ。

佐太郎 は？

丹羽 あんたの与太話はおいといてさ…上田くんのことだろ？ウチのアレ。

佐太郎 ええ、アレですね。

丹羽 ヒトの部下つかまえて…ウチのアレ？親戚じゃあるまいし！

佐太郎 いや、孫みたいなもんですよ。子孫と言えはいいんですか。お妻さんとの間に生まれたね…子供の子供のず
ーつと孫の…。

丹羽 ちよんまげ…。(佐太郎のちよんまげに触る)

佐太郎 なっ！(逃げる)

丹羽 幽霊？侍の幽霊？

佐太郎 だから、構造ですって。

丹羽 幽霊だろ？触れるけど。

佐太郎 そうみたいですな。

丹羽 上田くんがあんたの子孫だつて？

佐太郎 ええ。

丹羽 …信じがたいなあ。

佐太郎 私ですよ。…まさか、本当に…丹羽様…。(丹羽さんの顔に触れる)

丹羽 わあ！

佐太郎 ああ、すいません…もう、面立ちがそっくりで。

丹羽 面立ち？

佐太郎 丹羽五郎左衛門長秀様です。あなたの祖先で…私の上司ですよ。

丹羽 丹羽五郎左衛門？

佐太郎 ええ。

丹羽 この城の工事を担当した侍じゃないか！

佐太郎 ええ。

丹羽 俺が子孫だつていうのか？

佐太郎 ですから、はい。

丹羽 信じがたいなあ。

佐太郎 計算通り。

丹羽 はい？

佐太郎 まさに凶面に書き込んだ通りに現れてくれましたね。

丹羽 凶面？

佐太郎 はい、この城を建てたときに描いた図面通りです。

上田 ただいまあ。

佐太郎 この小僧は想定外でしたが。

上田 いやあ…失礼しました。突然目の前が真っ暗に。

丹羽 あー、無理すんなって、暑いからさ。

上田 いえ、大丈夫です。それより丹羽さん、ひとつ気が付いたんです。

丹羽 なに？

上田 継ぎ手の位置を見るに、どうもこの天主閣はフロアーごとに分解できる仕組みになってるみたいなんですよ。

佐太郎 …。

佐太郎 分解？

上田 ええ、つまりダルマ落としみたいな構造です。

丹羽 …どうしてそんな。(横目で佐太郎を見る)

上田 …ひよつとしたら、そのへんにこの城が四百年も建っていられた秘密があるのかもしれない。

丹羽 というと？

上田 この城は、木の弾力を利用した一種のバネみたいな造りなんじゃないかと…つまり、丈夫に造ってショックを跳ね返すのではなく…。

丹羽 ショックを吸収する。

上田 ビンゴ！台風や地震なんかで衝撃を受けるたびに、ゆるく連結したフロアーが少しずつズレてショックを吸収してきたんだ、この城は。結果、形を崩した。代わりに、決定的な崩壊を免れた。…どうです？丹羽

さん。

丹羽 面白い。

上田 でしょうか？案外、これビンゴじゃないですかねえ？

丹羽 調べてみな。

上田 はい！

上田くん、舞台から去る。

丹羽 (佐太郎に)：…そうなの？

佐太郎 ぜんぜん。的外れです。

丹羽 じゃ、何でこんな構造にしたの。

佐太郎 言ったでしょう。すべては、この城を美しく歪めんがための工夫なのです。ダルマ落としか、そんな品のない発想が出て来ること自体、アレはまだまだ小僧…。

課長 丹羽さん！（課長登場）

丹羽 あ…おかえりなさい。

課長 これ…これ！（手に紙を持っている）

丹羽 (紙を手に取り)：…これは？

課長 ふもとの寺の御文庫ごぶんこから、最近発見されたものです。今、画像送ってもらって…。

丹羽 図面？

課長 はい、このお城を建てた時の図面です。

佐太郎 !

丹羽さん、図面に見入る。

課長 これ見ると、どうやらこの城はダルマ落としみたいな構造になつてらしいんです。

丹羽 へえ。

課長 ほら、書いてある。「これダルマ落としなり。佐太郎。」誰なのかしらね？佐太郎さんって。

佐太郎 …。

課長 で、文化庁の担当者が言うにはね、これって何らかの…。

丹羽 ショックを吸収する構造なんじゃないか…って？

課長 え！なんで…。

丹羽 上田くんも、同じコト言つてましたから。

課長 すごい！さすが建設屋さんね。

丹羽 構造計算してみないと分かんないですけどね…でも、これで力学的強度が証明されれば…。

課長 そのまま建て直しても大丈夫なんでしょう？

丹羽 ええ、まあ。火事の心配は依然ありますけどね。

課長 是非、手を加えない方向でお願いしたいわ。

丹羽 ……すごい。

課長 え。

丹羽 あ、いや…。

課長 じゃあ早速、委員会の資料を用意します。来週までに天主の構造計算やつてもらって…。

丹羽 やつときます。

課長 ありがとう！

課長、舞台を走り去る。

丹羽 ……これ。

佐太郎 はい。

丹羽 すごいんじゃないです？

佐太郎 すごいでしょう。

丹羽 完成、完成後、崩壊時の図面と描き分けてあるのがまずすごい。壊れることを前提に図面を引くという、これも新しい。それから…これは…人の名前？

佐太郎 はい。

丹羽 人の名前がびっしりと…。

佐太郎 部品です。

丹羽 部品。

佐太郎 この城を巡る人物の行動も、計算して組み込んであるのです。もちろん、私のもありますよ。これが…あなた。

丹羽 …。

佐太郎 …で、これが課長さんね。あなたには、ちょうど崩壊直前のこの時期…この時期の図面を現代の手法で起こしてもらいたいと考えています。なんか…あるんでしょ？…。パソコン？

丹羽 やめて下さい、勝手に。

佐太郎 え？

丹羽 建設屋ですよ、私は。

佐太郎 知つてますよ。

丹羽 私に、わざと壊れやすいモノを建てろっていうんですか！？

佐太郎 ええ、それが上様のご意思です。

丹羽 誰だ上様つて。

佐太郎 織田信長様です。

丹羽 何でオレが、そんな何百年も前に死んだヤツの言うこと聞かなきゃならないんだ。

佐太郎 別に無理強いはしません。ただ…これですよ、丹羽さん。(図面を指さす)

丹羽 …。

佐太郎 これが、焼け落ちるんです。真っ赤に焼けただけながら。

丹羽 …。

佐太郎 あなたなら想像できるはずだ、図面を見ただけで克明に。

丹羽さん、目を閉じてしばし黙る。

佐太郎 気が変わったら、名前を付けてあげてください。

丹羽 名前？

佐太郎 あなたの子供の名前ですよ。

丹羽 子供？私の？

佐太郎 左様。ここの空欄にご署名下さい。

丹羽 他人の子供まで巻き込むつもりですか。

佐太郎 そのために空欄にしてあるんです。

丹羽 四十を過ぎて独身なんですよ、私。子供なんて…。

佐太郎 できるんですよ、これから…。

丹羽 ええ…。(嘲笑)

佐太郎 あなたと課長さんの子供が。

佐太郎 滅びることから考えましょう、国も城も。

長秀 …ふむ。

足軽 城に花火を仕掛けるなんてどうでしょう？

長秀 花火？

佐太郎 ああ、南蛮人が祝日とかに上げているアレですか。

足軽 アレです。…城に火がついたら色とりどりに。パーツと燃えて…。

佐太郎 ああ、キレイでしょうね。

足軽 でしょう？

佐太郎 ただ…。

足軽 へ？

佐太郎 少し品がない。

信長、少しイラ立つ。

足軽 品ですか。

佐太郎 ええ。

足軽 ですか…いいと思うんだけどなあ…こうブワーツと光つて、ドーンと消えて。

長秀 ところで、お前。

足軽 はい？

長秀 いつまでいるんだ？

足軽 せつかくだから、もう少し居ようかな。

長秀 邪魔だ。帰れ。

足軽 そう言わず。よいモノを持って来ましたから。

足軽、持参の箱から赤楽茶碗を出す。

佐太郎 茶碗だ！

足軽 ええ。

長秀 赤いのう…。

佐太郎 ああ…いいなあコレ。くれるんですか？

足軽 やらん！…と、言っていました。

長秀 上様が？

足軽 はい。

佐太郎 ああ…。(茶碗に触れようとする)

足軽 見るだけじゃ！…と、言っていました。

佐太郎 ええ…。(残念そうに)

長秀 で、この茶碗をどうしろというのか？

足軽 さあ…。

長秀 …。

佐太郎 わかった！

長秀 …え？

佐太郎 上様は茶の湯が好き。つまり城まるごと、全部茶室にしろと仰せなのです。

長秀 おお…。

佐太郎 全体的に品のある、枯れた趣味でまとめて…。

佐太郎と長秀、このアイディアに興奮。と、信長、足軽を呼んで耳打ち。

足軽 たわけがあ！

ビクツとする長秀と佐太郎。

足軽 何が品じゃ！何が枯れた趣味か！そんなもの、面白くもなんともないわ！小僧め！やっぱりお前は小僧じやったわ！さつき誉めて損しちゃった！その茶碗をよく見よ！よく考えなおせ！上手くしたら、その茶碗をやつてもよい。

佐太郎 え！本当に！？

足軽 信長に二言はないわ…よく考えよ。

長秀と佐太郎、足軽に頭を下げる。

足軽 つて…上様が言つてた気がしました。

長秀 (ハツと気がついて)…何でワシがお前に頭を下げとるんじや!

佐太郎 本当にコレ(茶碗)くれるんですね?

足軽 ええ、よい案が出たら。

佐太郎 よし、頑張ろう。

長秀 お前ら、上様のものを勝手に…。

佐太郎 いや、丹羽様、あれはまごうことなき上様のお言葉です。

長秀 …何を根拠に。

佐太郎 丹羽様をひれ伏させたあの気品、あれはまさに上様のもの…。

長秀 でもな…。

佐太郎 私は信じます。コレ、くれるんでしょう?

足軽 だから、よい案が出たらね。

佐太郎 …はは!

長秀 そういえば聞いたことがあるな…人の魂をこの胎はらにおさめて、話ができる者がこの世にはおるといふ…。

佐太郎 ああ、じゃあきつとそれですよ、この人。

長秀 ユタとかイタコとかいったか…まあ、神がかりの類じやろうが。

足軽 なんか、わかるんです。生まれつき。

佐太郎 信じます。

長秀 わしは信じないけど。

佐太郎 じゃ、どんどん考えましょう。この茶碗…うーん。

長秀 わかった！

佐太郎 え！

長秀 上様は城をまるごと…この焼きもので造れと仰っているのじゃ！

佐太郎 えー…。

長秀 どうじゃ…全部焼ものでできた城なんて古今例こきんがないぞ…しかも、壊すのも簡単。屈強な男達が、木づちで

もつてガチャーン！ガチャーン！…と。

足軽、茶碗をしまい始める。

佐太郎 あー！

足軽 真面目に考えよ…と、上様が申しております。

佐太郎 私は考えてますよ！このオジサンが…。

長秀 オジサン…。

佐太郎 そ、そうだ…ダ、ダルマ落とし。

長秀 ダルマ落とし？

佐太郎 天主を四層五層の楼閣にした場合ですな…この一層一層を全部バラバラになるようにしておくんです。で、

いぎ敵が迫りました時には、屈強な男達がコーンな木づちでコーン、コーン、敵の頭上には建物がドーン、ドーン！……。ド肝を抜きますよ。

足軽 ……。

長秀 で、それはこの茶碗とどういう関係が？

佐太郎 ですから、結果として最上階が残るわけです…こんなカタチに。(茶碗を逆さに伏せる)

足軽 あ！

長秀 触った！

佐太郎 で、最終的に上様がこの中から：「コンニチワ！」なんちって…。(茶碗をパカパカする)

足軽 貴様…。

長秀 お前、触りたかっただけじゃろう。

佐太郎 へ…いや、説明のためにやむなく…。

足軽 ワツハツハツハツ！

笑い出す足軽、呆然とする長秀と佐太郎。

足軽 大胆不敵なヤツじゃ。ワシの目前で触りおった…アツハツハツハツ…高いんぞ、これ、アツハツハツ…。

佐太郎 い…いくらくらい？

足軽 城ひとつくらい…アツハツハツ。

佐太郎 げえ…。

足軽 死ぬ覚悟は…アッハッハ…出来ておろうな。

佐太郎 …。

足軽 な？

佐太郎 は。

足軽 よし。

長秀 申しわけございませぬ。

佐太郎 …。

長秀 こやつの不始末は私の不始末にて…よくよく言って聞かせますゆえ、こたびは平に…平に…。

佐太郎 丹羽様…。

足軽 やる。

佐太郎 え？

足軽 そこまで欲しいなら、やる。わし、一個持つてるし。

佐太郎 …くれる？

足軽 うん。

佐太郎 や、やったー！

長秀 良いのですか？

足軽 その代わり、さつきみたいな意見、いつばい出せ。

佐太郎 あの…ダルマ落とし？

足軽 そうそう…ワシ、そういうの好き。

佐太郎 …。

足軽 ダルマ落とし…アッハッハッ…(足軽の人格に戻って)って言っていました。

長秀 上様が？

足軽 はい。

長秀 嘘だあ。

足軽 そんなこと言って…自分だつて結構真剣に謝つてたじゃないですか。

長秀 ああ…だつて方が一、上様だったら取り返しかないじゃない。

足軽 ですから、上様ですつて。

佐太郎 あの…今、上様聞いてます？

足軽 え、あ…いや。

佐太郎 そう…あー、恥ずかしい。

長秀 なにが？

佐太郎 茶碗欲しさに…チョーいい加減な意見を…ダルマ落として…。

長秀 でも、上様に誉められたぞ。

佐太郎 だから、思つたんです…私、上様と合わない。

長秀 えー…。

佐太郎 さつきみたいのが良かった…茶室とかそういうの…。

長秀 じゃあ、仕方がない。今回は茶碗をお返しして、この仕事からは…。

佐太郎 それは、嫌だ。

長秀　じゃあ、またダルマ落としみたいな意見を…。

佐太郎　それも嫌だ。

長秀　もう！じゃあどうするのじゃ！

足軽　いや…しかしダルマ落とし、私はいいと思いますけどね。

長秀　えー。

足軽　例えば、この…天主というんですか？この建物の一層一層をバラバラにしておいて…ちよつとずつズラす。

長秀　ズラす…？

足軽　すると、何とも傾いた趣のある建物に…。

長秀　ああ、そういうえば南蛮のイタリーにもそういう塔があると聞いたことがあるぞ。

佐太郎　いいですね…。

長秀　お。

佐太郎　いいですね…そんな城見たことない。

長秀　ノツてきたのう、佐太郎殿。

佐太郎　水平方向にもズラして、ちよつとこう…ヒネリを入れてみるのはどうでしょう。グニヤリと歪んで…。

長秀・足軽　前衛的！

佐太郎　なんか、ちよつと楽しくなってきたなあ。

三人、笑う。

足軽 もり上がつとるのう。

長秀 上様！

足軽 どうじゃ…やっぱりダルマ落としか？

長秀 は…はい…ちよつと傾けることにしました。

佐太郎 水平方向にもグニヤツと…。

足軽 …いかん。

長秀・佐太郎 え。

足軽 なんてそういうあざといことする？男だったらお前、ドーンと真つすぐ立てて、バーンと爆発して…な、ワツハツハツ。

佐太郎 爆発…。

足軽 そうじゃ…花火じゃ！花火を仕込め！爆発じゃ！

佐太郎 …。

足軽 グニヤツと歪めたり傾けたり、そんなイヤつたらしい趣味は信長にはないわ！分かったな！あつはつはつはつ！爆発！…すいません、そう言ってます。

長秀 …もう、上様はおらんか？

足軽 はい。

三人、ため息をついてへこむ。

佐太郎 あー、やだ。爆発やだあ…。(足バタバタ)

長秀 (足軽に) どうでもいいが、いきなり上様になるな。ビックリする。

足軽 いや、そう言われましても…。

佐太郎 私は…男らしいなかにも洗練されたカンジのがやりたいのに…上様が…上様があ。

長秀 じゃ、仕様がな。茶碗を返そう。

佐太郎 ヤダ。

長秀 …。

足軽 じゃあ…こういうのどうです？私…連絡取りますから、四百年後の人達と。

長秀 …は？

足軽 いや、ですからずっと先の…何百年も後の人達と連絡取りますから…。

長秀 そんなことできるのか？

足軽 はい。ですからですね…今は上様の言う通りにお城を建てておいてですね、先々の人間にちよつとずつカタチを変えてもらうんです。…そうすれば。

佐太郎 上様に気取られぬように、好きな城を建てられる！

三人、不気味に笑う。

佐太郎 やつて…はやくやつて。

足軽 お待ちなさいな…(目を閉じて下腹をさする)…ヒッヒッフー、ヒッヒッフー…はい！

長秀・佐太郎 ？

足軽 今、入りました、腹に。

長秀 腹に入つとるのか？四百年後が？

足軽 はい。

長秀 ど…どうしよう…どうしよう…。

佐太郎 どうしたらいいんですか？

足軽 じゃあ、直接話して下さい。(腹を差し出す)

佐太郎 え？

足軽 話して下さい、つながってますから。

佐太郎 あ…あー、もしもし。

足軽 耳をつけて。

佐太郎、足軽の腹に耳をつける。

佐太郎 うん…うん、はい…。

J r. やつと晴れたね。

女 J r. いいよ、洗濯物なんてあたし干すから。
女 J r. 居候なんだからさ、このくらいやるよ。
女 J r. いや、つていうかさ…嫌なの。
女 J r. は？
女 あたしのヤツもあるから。
女 J r. 何を今さら…。
女 いいよ。テレビ見てなよ。
女 J r. やらせてよ。
女 …。
女 J r. 何かしないと…色々考えちゃうから。
女 …そう。
女 J r. これ干しちゃったらさ、遊びに行こうか。
女 うん。
女 J r. 散歩行こうか、城まで。
女 嫌いなんじゃないの？お城。
女 J r. 嫌いだよ…だから、どうやってあの城をぶっ壊そうかさ…考えに行くんだよ。
女 …本気なの？
女 J r. なわけないじゃん。
女 …。

J.r. ただ、このままだと、僕の人生はこの市まちから一步も出られない…。癩しやくにさわる。どこを向いても目に入る。あの城が。

女 いいんじゃないかな、壊すの。

J.r. …。

女 考えるだけなら。

佐太郎 ダメでしょう。

女 ダメなの？

J.r. え？

女 本気じゃないんでしょ？

佐太郎 もつと根深いんだよ。ただ親父の面倒見るのが嫌だとか、この市まちを出たいとか、その程度のことじゃないだろう。

お前(J.r.)は、あの城の一部なんだから。

女 やめてよ、気味悪い。

J.r. …。

女 コーヒー淹れようか。

J.r. …ごめん。

J.r.、洗濯物を打棄つてリビングに座り込む。佐太郎、お茶を点て始める。女、流しでコーヒーを淹れる。

J r. 疲れてるな…。

女 …うん。

J r. 本当は、どうしても構わないんだよ。

女 え？

J r. 親父がどうか、学歴とか…君の事とかね。

女 …。

J r. もつと、根深いんだ。あの城…見ると、壊したくなる。

女 …。

J r. わかる？

女 わかんない。

J r. あれ(城を指して)…あれが燃えたら、キレイだろうな。

女 国宝だよ。

J r. うん。

佐太郎 だから、なんだつーの。

女 …。

佐太郎 キレイなんだから、燃えると。

女 でも、捕まっちゃう。

女、コーヒーを差し出す。佐太郎も抹茶を差し出す。

J r. 二杯も飲めないよ。

女 え？

J r. じゃ、こつちもらう。(コーヒーを取る)

愕然とする佐太郎。仕方なく、自分で抹茶を飲み始める。

女 やつぱさ、いったん東京行つたほうがいいかもね。

J r. …そうかな。

女 しばらく、このあたりから離れたほうがいいかも。

佐太郎 …そう簡単じゃないよ。

女 そうかしら。

佐太郎 (J r. を指さして) こいつを、殺す気か。

J r. …。

女 そんなに、好きなの？あの城。

J r. 嫌いだよ。

女 でも、離れたくないんですよ。

J r. だから、壊したい。

女 …困ったわね。

J r. 完成させたいんだ。

女 …？

J r. 燃えて、完成なんだよ。…跡形もなく。

佐太郎、立ち上がって拍手。

女 頭、おかしくなりそうだわ。

J r. …。

女 じゃあさ、こういうのダメ？

J r. ？

女 あたし、ついてくよ、東京。

佐太郎 !

J r. …いいよ。

女 いいよ、ついてくよ。

J r. 好きなんですよ、ニャ。

女 しょうがないじゃん。あなた、一人にしとくと犯罪者になっちゃう。

J r. 東京？

女 うん。

佐太郎 やめろ！邪魔すんじゃない！

女 するよ。嫌でしょ、好きなヒトが犯罪者なんて。

J r. …。

女 いつ頃行くの？

J r. …え。

女 仕事辞めなきや。どこ住もうか？

J r. …金、ないよ。

女 貸しといてあげる。働いて返して。

J r. いいよ。

佐太郎 そうだ、いいよ。

女 よくない。

J r.・佐太郎 …。

女 あきらめなさい、馬鹿なことは。

丹羽さん、立ち上がる。

佐太郎 困ったことになり申した。

丹羽 …。

佐太郎 これでは、いつまで経っても完成しない。

丹羽 …ええ。

佐太郎 あの派手さ、華やかさ…俗悪なのです、ただ建っているだけでは。

丹羽 でも…良かったのかな。

佐太郎 なにが！

丹羽 これで、解放されるのかもしれないですよ…私も、あの城から。

佐太郎 諦めるんですか？

丹羽 これで、子供も普通の暮らしを…。

佐太郎 それが、善いことでしょうか。

丹羽 …。

佐太郎 あの城は、燃えて完成だ。

丹羽 ええ。

佐太郎 さもなければ俗悪な、あの未完成な姿で建ち続け、あなたも私も永久に苦しめることになる。あなたの子供もです。いや…。

丹羽 …。

佐太郎 どうでもよい、そんなことは。あの城は、燃えて善い。燃えるのが善い、圧倒的に。

丹羽 うん。

佐太郎 それが、上様の望まれた美です。

信長、感極まって突然歌う。「美」について。

佐太郎 できるんですよ、これから…。

丹羽 ええ…。(嘲笑)

佐太郎 あなたと課長さんの子供が。

丹羽 ナニ!

課長 丹羽さあーん!(登場)

丹羽 …。

課長 委員会の日取り、決まりました。丹羽さんと上田さんにも出席してもらいたいですけど。

丹羽 ああ、そりやもう、結構ですよ、ハイ。

課長 良かった!あの…。

丹羽 はい。

課長 今晚、空いてますか?

丹羽 え!

課長 打ち合わせも兼ねて、親睦会でもと思ひまして。

丹羽 あ…ああ、でも最近そういうのうるさいですから…接待とか。

課長 いえ、飽くまで会費制で。

丹羽 いやあ、上田くんの都合も聞かないと…。

上田くん、クリップボードとペンを持って登場。何やら忙しそうに継ぎ手の位置をチェックしている。

丹羽 あ、上田くん。

上田 はい。

丹羽 夜ヒマ？

上田 たった今、忙しくなりました。

丹羽 あら、そう…じゃあ今回は中止で。

上田 何ですか？

課長 親睦会をと思ひまして。

上田 いいじゃないですか。行ってらっしゃい。

丹羽 え？

上田 晩に名古屋出て、一杯やろうって言ってたじゃないですか。

丹羽 いや、でもお前、課長さんと二人じゃあ…。

課長 私は構いませんけど。

丹羽 え！？

課長 ちよつと…どうしても相談したいことがあります。

丹羽 ちよつと…おい、上田！（近寄ってささやく）

上田 何すか、気持ち悪い。

丹羽 つき合い悪いぞお前。

上田 しょうがないでしょ。今日中にこれ仕上げたいんですよ。

丹羽 こっちだって仕事だろうがよ。

上田 あーヤダ、そういうの。

丹羽 あ!?

上田 僕、仕事と遊びはキツチリ分けてますから。今日は仕事の日い。

丹羽 上田あ!

課長 あのお…ダメそうですか?

佐太郎 行きます。

丹羽 あ!

課長 良かった!じゃあ、7時に世界のやまちゃん本店で。(ケータイを出す)…ちょっと、お店取って来ます。(課

長、退場)

丹羽 …。

佐太郎 良かったね。

丹羽 何が。

佐太郎 いいキツカケになるよ。

丹羽 何の。

佐太郎 交際の。

丹羽 勝手に話を進めんじやない。

佐太郎 どうしてそう頑かたくかなあ。付き合ってる女でもないの？

丹羽 いない。

佐太郎 じゃあ、いいじゃん。

丹羽 人生に関わるからだよ！俺の！結婚するだの子供ができるだの…何で城の図面なんか決められなきゃならないんだよ！

佐太郎 この城が美しいによつて…。

丹羽 ？

佐太郎 それが善いことだから。

課長 丹羽さあくん。(息を切らせて登場)

丹羽 はい。

課長 鍋コースにしようと思うんですけど、「ぶるるん鶏コラーゲン鍋」と「やみつきホルモン鍋」、どちらにしますか？(上目遣いで)

佐太郎 …。

丹羽 …。

佐太郎 課長さんじゃダメか。

丹羽 いい。

課長 ？

丹羽 ぶるるん鶏コラーゲン鍋で。

課長 (オツケーのポーズ)…(ケータイに)はい、はい、カラーゲンで、はい…「ぐるなび見ました」？言います。ハイ…

(ケータイを切る)…じゃあ、そういうことで。

丹羽 あの…(こ)相談したいことってというのは？

課長 ああ、ちよつと…ちよつとです。

丹羽 はあ。

課長 では、後ほどおろ。(退場)

丹羽 …。

上田・佐太郎 イイ感じじゃないっスか。

丹羽 へ…よせやい。

上田 7時にやまちゃんか…僕も行くのかな。

丹羽 なに！

上田 冗談っすよ。

丹羽 上田、こいつう！(笑顔全開で上田くんのこめかみグリグリ)

上田 いてえ！

二人、笑う。頷きながら見守る佐太郎。

上田 でも、気をつけて下さいね。

丹羽 え？

上田 クライアント側の人間と懇ろねんじょになるなんて、身の潔白を疑われかねませんから。

丹羽 …。

上田 まして公共受注ですからね。…僕は応援してますけど。

丹羽 うん。

上田 建設屋の本分を忘れないで下さい。

丹羽 おう。

上田 何か偉そうなこと言っちゃいましたが…じゃあ、僕、上見て来ますから。

丹羽 …上田くん。

上田 はい？

丹羽 サンキュー。

上田くん、はにかんで退場。

佐太郎 なんだあいつは、水を差すようなこと言いおつて。

丹羽 …。

佐太郎 しかし、これで何もかも上手くいくでしょう。あなたは結婚し、子供をつくる。この図面は最新の様式に描きな
なおされ、再び立ち上がった天主閣にあなたの子供が…。

丹羽 いや…。

佐太郎 え。

丹羽 描かないよ。

佐太郎 !

丹羽 そんな危ない図面。

佐太郎 …しかし。

丹羽 確かにすごいよ、この…ゴテゴテと飾りたてたグロテスクな塔が、立ち上がり、歪み…再び立ち上がり、崩れる。…この手で現実にしてみたい光景だ。

佐太郎 ならば…。

丹羽 だが、俺にも建設屋としての節度がある。…彼女とも、業者とクライアント以上の関係になることはないだろう。

佐太郎 逃げられますか？

丹羽 …。

佐太郎 これ(図面)、見ちゃったのに…。(図面を見つめる)…私だって逃げられないんだ…それが正しいとは思えないんだ…。

丹羽 …。

佐太郎 あなただって、逃げ切れはしない。

課長さんが登場。窓から外を眺める。

課長 琵琶湖が斜めだ。
丹羽 課長さん。
課長 はい。
丹羽 …今日の親睦会なんですけど…。
課長 これ…。(窓の外を指さす)
丹羽 あ…はい。
課長 ほら、琵琶湖が斜め。
丹羽 というより、窓が斜めですね。
課長 そう考えるかしら。
丹羽 私はね。
課長 面白いと思うんだけど、城がまっすぐで琵琶湖が斜めと考える方が。
丹羽 課長さん。
課長 はい。
丹羽 今日の親睦会、やっぱり…ちよつと。
課長 え？
丹羽 クライアント側の人間と、二人きりで飲みに行くというのは…ちよつと。
課長 あ…。
丹羽 …ええ。
課長 …そうですね、分かりました。

丹羽 すいません。

課長 …じゃあ、お店キャンセルしてきますね。

丹羽 あの…。

課長 はい。

丹羽 私に相談って…？

課長 あ…じゃあ、(ケータイを出して)ちょっとあとで…。

課長さん、退場。

佐太郎 あがきますね。

丹羽 …。

佐太郎 …いいでしょう。すると、あなたは死ぬまで苦しむことになります。この悪趣味な姿で、この城は永々^{えいえい}建ち続けるのだから。

丹羽さん、眼前を覆う。

佐太郎 嫌でしょう。

丹羽 嫌だ。

佐太郎 課長さんと一緒になんなさい、悪いこと言わないから。で、この凶面通りに設計図を起こすんです。

丹羽 嫌だ。

佐太郎 仕上がつたら、ここに名前を書き入れます。あとは…彼がすべてを消してくれるでしょう。

丹羽 …。

佐太郎 あなたの息子が。

課長さん、舞台に戻って来る。

課長 お待たせしました。

丹羽 …。

課長 ごめんなさいね…無理にお誘いしちゃって。

丹羽 いえ…。

課長 また、今度…。

丹羽 相談事って？

課長 え？…ああ。

丹羽 どうぞ…聞いてますから。

課長 …話しくいなあ、お酒入ってないと…ちょっと個人的なことだから。

丹羽 いいですよ。

課長 私ね…家を建てようかと思ってる。

丹羽 家？

課長 ええ、そうなんです。

丹羽 はあ…：そういつたご相談ですか。

課長 はい。

丹羽 ウチは戸建こだてやってないからなあ…。

課長 丹羽さんは…：やってないんですか？

丹羽 はい？

課長 一戸建の設計とか。

丹羽 やつてません。

課長 できないんですか？

丹羽 できます。でも、やりません、仕事としては。

課長 やつて頂けないかしら。

丹羽 いや…：私は…：もつとその道のちゃんとした人を…。

課長 丹羽さんにやつて頂きたいんです。

丹羽 …：なんで？

課長 さつき、お茶飲んでらっしゃったから。

丹羽 …：お茶。

課長 朽ちかけた天主閣で、赤楽茶碗で一服って…：ちよつとカッコいいかと。…：ちよつとワザとらしいけど。

佐太郎、ちよつと嬉しそうにお茶を点て始める。

丹羽 …ですかねえ。

課長 ああ、こういうセンスの人なら、私のこと解ってくれるかもしれないと…。

佐太郎 立ち話もなんですから、どうぞ。(お茶を差し出す)

課長 まあ！ありがとうございます。

課長、丹羽さんの前に正座する。お茶をすすする。

課長 結構なお点前で…って言ったらいいかしら？

丹羽 いや…別に。

佐太郎 今日はいんじゃない？無礼講で。

課長 じゃ、遠慮なく。(一気にぐつとあおる)…おかわり。

佐太郎、茶碗を受け取る。丹羽さん、少し笑う。

丹羽 どんな家ですか？

課長 え？

丹羽 相談くらいなら乗れるかもしれない。

課長 本当ですか？！

丹羽 ええ。

課長 この、お城みたいのがいいです。

丹羽 …。

課長 というのは極端なんですけど…私、古い物が好きで。

丹羽 言ってみましたね。

課長 古民家、移築しようとか思っていました。

丹羽 ああ、流行ってますね。

課長 私も…もう古民家みたいなもんなので。

丹羽 はあ？

課長 いやあ…この歳まで、自分の好き勝手なことばっかやってたから…完全に行き遅れてしまって、嫁に。

丹羽 そんな…だって若いでしょう。

課長 34ですよ、もう。

丹羽 いいじゃないですか。

課長 良くないですよ。私、変ってるし。だから、もう無理ですから、結婚とか。家ぐらい理想の家に住もうと思っ
て…。

丹羽 私は新築より、古民家の方が好きですけどね。

課長 あら…慰めて下さって。

丹羽 慰めじゃありませんよ。今の家って規格化されていてつまらん。プラモデルみたいだ。なんかこう…いいですよ
ね、古民家は。一軒一軒、意図があつて…設計者と、現場の職人と、建て主さんと…。人間も、規格化され
ない方が面白いと思います。うん。
久しぶりに誉められたわ。

課長 もうちよつと聞かせて下さい。…どんな家に住みたいですか？

信長、この辺りからテーマのインスタ。

丹羽さんと課長は、理想の家を身振りで実演する。

課長 私ね、遺跡が好きなのよ。

丹羽 遺跡？縄文時代とか？

課長 ああ、いいわね、縄文。

丹羽 竪穴式住居だな。

課長 ええ…。(嫌そうに)

丹羽 いや、現代風の…半地下にしましょう。

課長 で、畑なんかあつたりして…。

丹羽 あー、畑ね。

課長 昔の暮らしが体験できると楽しいわね。

丹羽 広めの庭と…屋上菜園。

課長 そこに、チャボを飼いたいわ。

丹羽 チャボ？

課長 実家で飼ってたのよ。

丹羽 じゃあ、大きめのケージと…。

課長 そこで、た、た、たまに…。

丹羽 何です？

課長 子供を…遊ばせたりして…。

丹羽 あー、子供ね…子供ひとりと。

上田 あー、疲れた。今戻りましたあ。

丹羽 お帰り。丁度いいや、お前子供やれ。

上田 えー。

丹羽 ほおら、上太郎、チャボだぞ。

なぜか佐太郎、チャボをやる。

上田 わ、わあーい！

丹羽 そうすると、旦那もひとりですかね。

課長 え、ええ…。

丹羽 じゃ、とりあえず私、旦那やります。

課長 は、はい。

上田 わあーい、父ちゃん。

丹羽 よおし、上太郎、よおし、よおし。

課長 あなたあ、ご飯よお。

丹羽 よし、上太郎、帰るぞ。(リアカーを引く)

上田 うん、ただ今あ！

課長 お帰り！

丹羽 見ろ、こんなに太くて長いダイコンが大量に…。

課長 まあ！お疲れさま。

丹羽 うん、よし、飯の前に風呂にすつべ。…五右衛門風呂なんかどうです？

課長 いいわね！

丹羽 よおし、上太郎、入るぞ！

上田 せまいよ、父ちゃん！

課長、火吹き竹で火を吹く。

課長 湯加減はいかが？

丹羽 熱ぐもねく、ぬるぐもねく…いいすもちだあ。

上田 父ちゃん、お城！

丹羽 …おう。

課長 今日はお城、ライトアップね。

丹羽 ああ…。

上田 あの城、父ちゃんが建てたんだらう？

丹羽 いや、俺は…。

課長 そうよ。

上田 すげえ！

佐太郎 お城の見える場所に土地買うなんて、どうでやんしょう？…コツコツコツ…。

丹羽 黙れ、チャボ！

課長 いいわねえ！さすが丹羽さん。

丹羽 いや…。

佐太郎 あなたは五右衛門風呂から、チャボの世話をしながら…子供の成長を見守るように、毎日毎日この城を見続けるだらう。あなたの脳裏には、炎に包まれ、崩れ去る天主閣が何千回、何万回と再現され…それはもう。

丹羽 幸せだあ…。

課長 ええ。

丹羽 課長さん。

課長 はい。

丹羽 やっぱやりましょうか、親睦会。

課長 え…でも。

丹羽 まだ、もうちよつと聞きたいんです、将来設計も含めてしつかりと。

課長 …はい。

丹羽 金かかりますよ、恐ろしく。

課長 ええ…でも…。

丹羽 二人なら買えます。

課長 …。

丹羽 二人なら…。

課長 …。

丹羽 ダメ？

課長 …買いましょう。住みましょう、二人で！

信長、歌う。「善」について。佐太郎、丹羽さんに凶面を示す。子供の名前の欄にサインを勧める。丹羽さん、ためらいながらサイン。

丹羽 上太郎…ごめんな…父ちゃん、幸せだ。

上田 …。

丹羽 …幸せだ。

信長の歌が終了。

佐太郎 うん…うん、はい…はい…よろしく。

長秀 どうじゃった？

佐太郎 会って来ました、丹羽様の子孫に。

長秀 え！話ができるだけじゃないのか！？

佐太郎 …よし、じゃあ早速今後の流れを…。(足下の図面に加筆し始める)

長秀 次！次わしやる！

足軽 いいですよ。

長秀、耳を足軽の腹につける。

足軽 何を遊んどるかあ！

長秀 ぬお！

足軽 ちよつと目を離すとすぐこれじゃ。

長秀 あ、いや…遊んどったわけでは…。

足軽 で、首尾はどうなつとるか。

佐太郎 城を琵琶湖に流すというのはどうでしょう。

足軽 流す。

佐太郎 油を塗った斜面を天主のすぐ横に用意しまして、いざ落城という折にはツルンと琵琶湖に流します。

足軽 ほう、ツルン。

佐太郎 一瞬にして、城が湖に消える様はまさに豪快。上様好みかと。

足軽 いやむしろ、プカプカと浮かぶようにしてはどうか？

佐太郎 プカプカ？

足軽 そうじゃ！プカプカと大阪まで流すのじゃ。そして、その城を大阪城とする！

佐太郎 はは！

足軽 どうじゃ！わしの意見は！

佐太郎 完璧にござります！

足軽 よし、今すぐ計画に盛り込めい。

佐太郎 は！

足軽 ワアツハツハツハツ…（一瞬で足軽に戻る）本当にやるんですか？

佐太郎 やるわけないじゃん…それらしい構造は造りますけど。

長秀 お前、ウマくなったのう。

佐太郎 それより、私のハラは決まりましたよ、丹羽様。

長秀 ほう。

佐太郎 この城は燃やします。

長秀 燃やす？

佐太郎 爆発なんて俗な趣向には断じてしません。静かに、赤々と燃やすのです。(赤楽茶碗を眺める)

足軽 ああ、いい画えですねえ…。

佐太郎 そして、私はその城を造る部品となります。

長秀 部品？

佐太郎 私だけではありませんよ。この城に関わる人間すべてを部品と見做みなし…いや、この城に起おこる事件、事象、この四百年の時間をすべて「城」となすのです。…協力して、もらえますか？(足軽に)

足軽 よいですとも。

長秀 この座にいなから…この城の四百年を見守ると申すか。

佐太郎 如何にも。

長秀 面白いのう。

佐太郎 されば、この遊びに丹羽様の血をお捧げ下さいませ。

長秀 血とな？

佐太郎 丹羽様の血筋すべてを、この城の部品として組み入れるのです。

長秀 …。

佐太郎 よろしいですか？

長秀、目を閉じる。そして、うなづく

佐太郎 四百年後につないで下さい。

足軽 はい。

佐太郎 城を、壊します。

足軽、ラマーズ法。

足軽 どうぞ。

佐太郎 これで、完成だ。

佐太郎、足軽の腹に耳を寄せる。

J r. と女、引越しの準備をする。

女 終わった？

J r. うん、あらかた。

女 J r. じゃあ、OK？
女 J r. (周りを見回して)…うーん、いいんじゃない。
女 そう。
女 J r. お疲れ。
女 疲れた。
女 J r. 明日、何時だっけ？引越屋。
女 昼前。
女 J r. あ、そう。
女 うん。
女 J r. …寝ようか。
女 早くない？
女 J r. だつて、どうすんの？テレビしまつちやつたし。
女 出そうか。
女 J r. やめなよ。
女 お茶飲む？
女 J r. やかんは？
女 しまつちやつた。出そうか？
女 J r. やめな。
女 うーん。

J.r. 寝よう。
女 そつか。

二人、布団を敷く。

J.r. ベッド、棄てなくても良かったんじゃない？

女 いいよ、新しいの買おう。

J.r. あー…疲れた。

女 うん。

J.r. おやすみ。

女 …おやすみ。

二人で寝る。と、しばらくして、J.r. が起き出して来る。ベランダに立ち、城を眺める。

女 寝ないの？

J.r. 寝るよ。

女 …まだ、気になんの？

J.r. …うん。

女 大変だね。

J. r. 女 …。
女 でも、幸せだよ、あんたは…。
J. r. 何が？
女 それだけ執着できる物があるんだからさ。
J. r. …。
女 普通はないんだもん。
J. r. …うん。
女 …うん。
J. r. …え。
女 働けば、忙しいし。楽しいこといっぱいあるし、東京行けば。
J. r. …うん。
女 …自然にそうなるよ。
J. r. …そうかな。
女 そうだよ。
J. r. …でも…。
女 うん？
J. r. どうだい？あれ（城を指さして）…燃えたら。
女 まだそんなこと言ってる。
J. r. どこまでも、ここなんだよ。

女 は？

J. ああの悪趣味な建物が建っている限り、僕はこの安土城市から出られないんだ。東京に行こうと、どこへ行こうと。

女 何言ってるの？

J. 僕の視界の隅には、常にあの天守閣がチラチラして…。その度に、僕はイライラするだろう。忘れることなんて、ないだろう。

女 じゃ、どうすんの？やめんの？引越し。

J. …いや。

女 でも、ダメなんでしょ？

J. …うん。

女 何で？

J. それが、善よいことだから。

女 よくないじゃん。犯罪じゃん。

J. でも…。

女 でも、じゃない！寝るよ。

J. でも…キレイなんだよ。

女 …。

J.F.、しばらく安土城を眺めている。女、布団に包まって寝たふりをする。J.F.、明かりを消して寝る。しばらくして、起き出して外に出る。女、起き上がる。しばらく黙って下を向いているが、窓の向こうの変化に気がつきベランダに出る。

女 あ…キレイ。

佐太郎、足軽の腹に耳をあてる。しばし目を閉じる。そして、開く。

長秀 どうじゃ？

佐太郎 …見事燃えました。

長秀と足軽から拍手が起る。

佐太郎 さあ、今のうちに凶面にまとめましょう。

足軽 はい。

長秀 …しかしな、燃えてしまった城の凶面を引くというのも妙な感じじやな。

佐太郎 今は、まだ建ってませんよ。

長秀 でもお前、燃えるところを見たわけじゃろ、その目で。

佐太郎 はい。

長秀 …よくヤル気になるものじゃ。

佐太郎 いずれ、これが真実でしょう…「城は建てれば崩れるものである。」

長秀 …ふむ。

佐太郎 建てる前から分かっていることです。

長秀 じゃあ、今、命がけでやっておるこの仕事は一体何じゃ？

佐太郎 さあ…ただ、上様がそれを「善し」とする限りは…。

長秀 勤める外ないわけじゃ、奉公人たる身としては。

佐太郎 はい。

長秀 まこと、真実とは残酷なだけのものじゃが…(図面を見渡して)上様はそんなものを見出そうと躍起になつておられる。

佐太郎 ええ。

長秀 何故なぜじゃろう。

佐太郎 さあ…嘘よりは…人間、真まことの方を美しいとか、善いものであるとか感じるものです。

長秀 だから、なぜ？

佐太郎 なぜでしょうな…。さあ、まだ仕上げの部分が完成しただけですよ。これから、二百年後、百年後の人間と

も連絡をとらなければ。

長秀 なあ…わしの、子どもたちはどうじゃった？

佐太郎 は？

長秀 四百年後の…ちゃんと、やっておったか。

佐太郎 …ご立派でしたよ。

長秀 …そうか…それは。(うれしそうに笑う)

足軽 できたか。

佐太郎 上様！…はあ、今、地下に落とし穴を造っているところでした…。

足軽 落とし穴？

佐太郎 は、城の地下がパツクリと観音開きに開きまして、真つ逆さまに…。パツと開き、パツと落ちて、パツと閉まる。

この潔しんげつさ、爽快感といったら、もう…。

足軽 燃えたのか？

佐太郎 は？

足軽 わしの城が。

間。

佐太郎 は。

間。

佐太郎 燃えましてござりまする。

足軽 ……そうか。

佐太郎 それは赤々と、美しく燃えました。

足軽 うむ…ちよつと待つてろ。

佐太郎 え。

信長、立ち上がって舞台中央へ。

長秀 上様！

信長、凶面を眺めチェックする。足軽、信長の気持を通訳する。

足軽 ああ…いいねいいね、この堀いい。うん…この虎口も立派でいい。うん。

佐太郎 上様。

信長と足軽、振り返る。

佐太郎 何で自分でしゃべらないんですか。

足軽 御前ですよ。お控えなさい。

佐太郎 は！

足軽 …長秀。

長秀 は…は！

足軽 足らん。

長秀 …。

足軽 …。

長秀 何がにござりますか。

足軽 …。

長秀 何が足らぬと申されますか！

佐太郎 丹羽様！（佐太郎を止めようとする）

長秀 ご覧下さい。山ひとつ、覆うがごとく石垣！五層七階の大天主！国滅びなんとする時は、一時に城燃え上ひととき

るよう、細工に細工を重ねましてござります。…その上、私は子孫こまじの血までこの城に捧げたのですぞ！

足軽 …。

長秀 これで足らぬと申されては、この城に尽くし抜いた我が四百年の血に申し訳が立ちませぬ。上様…上様、誉

めてやっして下さいませ。この城に全てを捧げた、我が子供たちを…誉めてやって…。

足軽 じゃがあしいわあ！（長秀を蹴る）

長秀 痛！

佐太郎 上様！

足軽 わしはのう、長秀…わしは「城」に住みたいのじゃ。

長秀 は？

足軽 「城」は自おのずから建つものじゃ！誰に建てられるものでもない。わしが建てるのでもない。この地上が生まれ、

人が生まれ、国が生まれ、城が生まれた…というだけじゃ。事実があるだけじゃ！…そして、自然に倒れる。

誰のお陰でも、誰が悪いのでもない。

長秀 …そんな。

足軽 それをお前は…わしが建てたの、自分が壊したのと…作さく為いに満ちておるわ！

長秀 …。

足軽 そんなワザとらしいものに、わしは住めん。

大きくなずく信長。

佐太郎 上様。

足軽 なんじゃ。

佐太郎 上様の城、恐れながらこの地上にはございません。

足軽 …なに。

佐太郎 城は丹羽様でして。

足軽 ん？

佐太郎 上様が建てたのでも、丹羽様が壊したのでもなく。…城は丹羽様でして。

課長 すごい！まっすぐ建ちましたねえ！

丹羽 ああ…ええ。

佐太郎 いやあ、こりや大したもんですよ、丹羽様。上様もお喜びでしょう。

長秀 うん、まあな…ワッハッハッ！

女 あーあ、やつちやつたねえ。

息を切らせ膝をつくJr.。

女 でも、キレイだね、やっぱり。

ニツコリと笑うJr.、次第に笑い出す二人。

佐太郎 丹羽さん。

丹羽 はい。

佐太郎 完成、おめでとうございます。

丹羽 どうも、お陰様で…ありがとうございます…。

J r. 父さん。

丹羽 …。

誇らしげに丹羽さんの手を取るJ r.。

J r. おめでとう。

丹羽 完成だ…お前、偉いよ。偉い。

J r. 赤いね。

丹羽 赤い…キレイだ。

城の方角を眺める一同。

信長、歌う。「真実」について。

課長と女、安土城の女神と化し、舞う。

佐太郎 …かくして城は消え去り、そこにあったという事実が残るのみ。(舞台全体を指して)この四百年が城なので
す。丹羽様の四百年こそ、自ずから建つ「城」でありますれば…誰が建てたわけでもなく、誰が壊したわけ

もなく…。

足軽 …。

佐太郎 この城をおいて、上様に「城」は望めますまい。…少なくとも、この地上にあるうちは。
足軽 長秀。

長秀、信長を見る。信長、親指を立てて“グー”のポーズ。

足軽 見事じゃ。

長秀 …は。

崩れ落ちる長秀。

長秀 ありがたき幸せ。

全員、長秀に駆け寄る。

足軽 じゃが…わしは、ここには住まぬ。

長秀 …え。

足軽 ここは、わしの城ではない。

佐太郎以外、進み出る。

佐太郎こうして、城は完成。五層七階の華麗な天主閣、唐天竺、南蛮にも例を見ない、石造りの華麗な大城おおじろだった。

…だが、その三年後、城はあっさりと燃えてしまった。上様も亡くなり、あの城があったことなど、今や誰も覚えていない。(信長退場)

その六年後、今度は丹羽様が亡くなってしまった。…丹羽家四百年も、城があったという事実もあっさり消えてしまったのである。(佐太郎以外、退場)

「まだ、安土山には城が建っている」

私はこれを真実にするかと決めた。城は必ず崩れて消えてしまう…残酷ながら。でも、私の中でだけ、あともう少しだけ…建たせておいてやろう。

女が一人、茶を点てている。

佐太郎 ここは…。

女 佐太郎様…。

佐太郎 …は？

女 佐太郎様。

佐太郎 あなた、私が見えなさるのか？

女 はい。

佐太郎 これは誠に都合がよい。今はいつですか？

女 は？

佐太郎 あるでしょう、明治何年とか…昭和何十年とか…。

女 はあ…。

佐太郎 “くーしゅー”というのはまだですか？

女 くーしゅー？

佐太郎 何でも、空から火薬の入った“しょーいだん”というのを落とすらしいのです。そんなものが城に当たったらひとたまりもない。

女 城？

佐太郎 ええ、安土山はどこでしょうか？城が建っているでしょう。

女 …安土山だったらいいですよ。

佐太郎 ここ？

女 はい。

佐太郎 城は？

女 さあ…あやえちゃん。

女2 はい。(席から立ち上がる)

佐太郎 課長さん!?

女2 え？

佐太郎 どうしてここに！？

女2 どこかで…お会いしたかしら？

佐太郎 え？

女 会ったのかもしれませんが。

女2 …ああ。

女 何回だつて会っているのかもしれませんが。

女2 …そうね。

佐太郎 ？

女 ところで、こんなところにお城なんてあったかしら。

女2 あったわよ。

女 あったかしら。

佐太郎 あるんですか！？

女2 ありますわ。

佐太郎 どこに？

女2 呼びます。ねえ…。

男 はい。(席から立つ)

佐太郎 ！？

女2 あなた、お城よね。

男 城です。

佐太郎 は！？

女 どうぞ、お座りになって。今、お茶を点てますから。

男 失礼します。(座に加わる)

佐太郎 ふざけてはいけない：私はお城へ行きたいのです。

女2 だから、いるではありませんか。(男と頷き合う)

佐太郎 (ため息)：茶席の座興でしょうが、今それにつき合っている暇は、私にはないのです。

女 まあ。

佐太郎 では、このあたりに、丹羽という名字の者はおりませんか？

女2 います。

佐太郎 ほう…どこに？

女2 この方。(男を指して)

男 丹羽です。

佐太郎 おお、あなたが！城は…城はどうなったのですか？

男 私です。(自分を指さして)

佐太郎 やめて下さい、悪ふざけは！まさか…もう燃えてしまったのですか？

男 いや、ありますよ…ほら。(自分を指さす)

佐太郎 もう！あなたが丹羽で、あなたが城なら、じゃあ、あなたは誰ですか！？丹羽城にわしろさんですか？

男 丹羽城です。

女2 まあ…。(笑う)

女 面白いわね。

佐太郎 面白くない！…くそう、一体今はいつなんだ？…ここは…一体…。

女 まあまあ、お座りになつて。

女2 立ち話もなんですから…。

佐太郎、憮然として腰を下ろす。

女 今、お茶を点てますね。あやえちゃん…お道具。

佐太郎 …茶碗ならあります。

佐太郎、赤楽を出す。

女2 キレイ！

佐太郎 見事でしょう。

女 ホントに…では、こちらで点てましょう。

佐太郎 ええ。

女、茶を点て始める

佐太郎 ところで、城殿。

男 はい。

佐太郎 ここは本当に安土山か？

男 はい。

佐太郎 嘘でしょう。安土山なら、ドーンと城が建っているはずですよ。

男 この山で、城は私以外にはありません。

佐太郎 いい加減になされい！侍を馬鹿にされるか！

女 まあまあ：どうぞ、佐太郎様。（茶碗を差し出す）

佐太郎（慥然として）ところで：あなたは、なぜ私の名を知っておられるのか。

女 何でも知っておりますよ、あなたのことなら。ねえ、城さん。

男 ええ。

女 私達は、もうずーっと昔からここに住んでおりますから。

佐太郎 へえ：私は昭和十九年を目がけて来たんですがね：。私を知る人がいるってことは、まだ城も建っていないごく最近に来たんですね。

女2 もしくは、城なんてなくなっちゃった、ずーっと後の世に来てしまったか。ねえ。（男に）

男 失礼だな。ありますよ、城。（胸を張る）

佐太郎 もうじき、このお山には城が建ちますからね。

女 へえ。

佐太郎 気の毒ですが、あなた方にも立ち退いてもらわないといけないな。

女2 えー。

女 お城の端っこにでも置いてもらえないかしら。

男 いいですよ。

女 ほら、本人もこう言ってますし。

佐太郎 ダメでしょう。

女 なぜ？

佐太郎 上様がそれを許すとは思えません。

女 誰？上様つて。

佐太郎 織田信長様です。

女2 ナニガ様だか知らないけど、この山には私達の方が先に住んでたのよ。

佐太郎 いやあ…お気の毒ですが…。

女 どうしても建てる気なのね？

佐太郎 建てます。

女 燃えちまえばいいんだ、城なんて。

男 ええ！やめて下さい。

女 だつて…。

佐太郎 まあまあ、きつと立退き料をたんまり弾んでくれますよ。

女 要らないわよ、そんなもん。

男 そう言わずに…。

女2 賃貸しならいいわよ。

佐太郎 賃貸し？

女2 三年もしたら引き払ってちようだい。逆に。

男 ということは三年後には…。

女 …燃やすか壊すか。

男 いやだ！何とかして下さい。(佐太郎の後ろに廻り込む)

佐太郎 申し訳ないんですがね、少なくとも三百年…いや、四百年は建てておく予定なんです。

男 ほ…本当ですか！？

佐太郎 武士に二言はありません。

女2 じゃ、四百年経ったら退く^どのね。

佐太郎 はい、燃やします。

男 ええ！

女 いいじゃないの、四百年も建つてられるんだから。

男 燃えて死ぬのはいやですよ。

女2 でも、よほど綺麗なのよね、お城。

佐太郎 はい、全山丸ごと総石づくり、本丸にはこーんな大きな楼閣が建ちますからね。金欄朱塗りのピカピカギン

女2 こういうのを建てようとか…。

女 ここをこうしてやろうとか…。

女2 カッコよいとか悪いとか。

女 善いとか悪いとか。

女二人、笑う。

女2 上様だつて喜ばないわ、きつと。

女 お止しなさい、建てるの。

女2 くたびれるだけよ。

男 ひどい…あんまりだ。

佐太郎 …。

男 僕は生れて来た意味なんてなかったんだあ…。

男、泣く。女二人、笑い続ける。

佐太郎 …おい(女二人に)

女二人 え？

佐太郎 どうすんだよ…泣いてるじゃねえかよ。

女 …だつて。

女2 ねえ。

佐太郎 俺も、城建てないの賛成。

男 ええ！

佐太郎 上様の望むものはこの世にはないよ。“ある”だけで、もう善くない。でもね…“ある”ものはしようがないじゃない…考えてしまったものは…。

女 じゃあ…。

女2 建てるの？

佐太郎 建てる。

男、喜んで顔を上げる。

佐太郎 でも、すぐ燃やす。

男 (大声で泣き出す)

佐太郎 もう一杯、所望したい。

女 はい。(茶を点てる)

佐太郎 泣きなさんなよ…しばらく、私の頭の中にいてよいから。

男 …でも。

佐太郎 はい？

男　あなたが死んだら？

佐太郎　さあ…でも、考えてしまうんじゃないかな。

男　…。

佐太郎　誰かが…どうしても。

女　…どうぞ。

佐太郎、一礼して茶を受けとる。眺めまわして、飲む。

佐太郎　あー…うまい、茶だ。

完

※本作品を使用して上演する場合には、事前に権利者の許可を受ける必要があります。また、上演したものを記録する場合は、作者に上演ならびに複製(記録映像作成)許可料を支払うことで、脚色・改変等含めての使用と、上演したものを映像等に記録することが出来るようになります。

○上演ならびに複製許可料について

アマチュア・学生団体の無料での公演でも、原則として 5000 円を頂戴します。プロの団体の公演(有料・無料問わず)、及び、アマチュア・学生の団体の有料での公演については、座席数・ステージ数・チケット料金等を考慮して金額を提示させていただきます。

○非営利・無料・無報酬での上演

著作権法第 38 条 1 項により、非営利・無料・無報酬での上演について、無許諾かつ著作権使用料無料での上演は可能です。ただし、第 50 条の「著作者人格権に影響を及ぼすものと解釈してはならない」という条文により、これには以下の条件が付加されます。

- ・ 作品名と作者名を明示する。
- ・ 台本に変更を加えない。題名も変更しない。
- ・ 上演の映像・音声記録をしない。またそれを勝手に複製して配ったり販売したりしない。
- ・ 非営利な活動である。(営利団体からの協賛・後援等も受けない)
- ・ 入場料などを受け取らない。(おひねりやカンパ、グッズの売り上げも含む)
- ・ 上演に際して、誰も報酬を受け取らない。(交通費など最低限の実費は除く)

以上の条件を満たせば、著作権法上は作者に断りなく本作を上演できます。

しかし、できることなら以下までご連絡頂きたい。



劇団！王子の実験室

O-Ji laboratory

主宰 田口 浩一郎

Koichiro Taguchi

〒231-0054 横浜市中区黄金町2-7先 黄金スタジオD
Tel. 090-4926-9732
✉ oozino@icloud.com



よろしくお願ひ致します。